

## 児童健全育成賞（数納賞）

# 中学生への学習支援事業がつなげる人材育成

北海道札幌市

公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会

こども事業部こども育成課 運営係長 古野 由美子

## 1. はじめに

今や、子どもの6人に1人が貧困家庭で育っているという日本社会の中で、子どもたちに本当に必要な支援はどのような支援なのだろうか。貧困が子どもの成長にどのような影響を与えるのか。札幌市では平成24年度から、生活保護受給世帯の中学生を対象にした学習支援事業に着手した。私たち、公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会（以下、活動協会）では、札幌市の児童会館を長年管理運営してきた実績と職員のスキルを持って、この事業に携わることを希望し、受託を受けたのがスタートである。当事業は平成27年度で4年目を迎えるが、私は、初年度からこの事業にスタッフとして関わらせていただき、中学生と向き合いながら、「貧困の連鎖を断ち切る」ことを目的とした学習支援事業のあり方、そして必要性を模索してきた。

今回、私たち活動協会が実践してきた中学生への学習支援事業のスタイルを提示するとともに、中学生の学習支援をとおして気づいた人材育成の効果について言及したい。また、児童会館職員がこの事業に携わる意味について考えたい。

## 2. 子どもの貧困

厚生労働省の調査によると、子どもの貧困率は、2012年に過去最悪の16.3%となり、およそ6人

に1人が貧困という結果となった。札幌の児童会館にも生活保護受給家庭や就学援助利用家庭の子どもたちが少なからず利用していることや、子どもの数は減少しているが、児童クラブ登録数は右肩上がりの状況から見ても、この数年で、親の労働環境が変化し、それに伴い子どもたちの育ちの環境も変化してきていることが実感できる。しかしながら、一般的に「貧困」という言葉の持つイメージが発展途上国で暮らす子どもたちであり、日々、食べることや清潔を維持することに苦慮している日本の家庭を想像することが難しいのは、私だけではないかと思う。今、「貧困問題」は遠い外国の問題ではなく、同じクラスの友だちのことかもしれないということ意識しなくてはならない。そして、自分自身も「貧困」の当事者になる可能性があるということも忘れてはならない。それくらい、今の日本社会は不安定な状況にある。

「貧困問題」の中でも、子どもの貧困が取り上げられる背景には、子どもの貧困が抱える課題は、経済的な面だけではないことが大きな特徴ではないだろうか。そして、だからこそ、親に対する経済的な援助や就労支援以外に、子どもたちに直接できる支援がまだまだたくさんあるということに気づくことができる。貧困な環境は、子どもの身体の成長、心の成長、生き方に大きな影響を与えていると言われている。また、貧困と低学歴・低学力には相関関係があるというデータも

ある。生活に追われて、成長期の子どもが必要としている親の目や親の手が子どもに向いていない環境というのは、学習に対する意識の醸成や子どもが自立に必要な支援を受けられないという状況を生み出している。教育や訓練の機会に恵まれないまま社会に出て、失敗体験を繰り返すことで次第に自尊感情も失われていく。そもそも、十分な自尊感情を持っていない子どもたちも少なくない。失敗体験などで高校を退学したり、就労しても継続することが困難であったり、就職、離職を繰り返すと徐々に正社員として採用されることも難しくなり、結果としてフリーターのようなアルバイトで賃金を得る生活では安定した収入を得ることは難しくなる。さまざまな要因が絡まりあいながら、結果的に生活困窮の連鎖から抜け出すことが難しくなるという状況がある。負の連鎖を断ち切るために必要な支援は何かを考えることが、「子どもの貧困」を解決するための一歩となる。

### 3. 札幌市の取り組み

平成24年度から、札幌市は生活保護受給世帯の中学生を対象にした学習支援事業を実施することとした。開始当初、その事業目的は、基礎学力の向上と高校進学、ひいては、貧困の連鎖を断ち切ることであった。活動協会は、札幌市から当事業を受託され、その企画・運営を始めた。はじめての試みに試行錯誤しながらも、4年目を迎えた今は、ある程度のスタイルと根底に流れる目的を明確にすることができてきた。

札幌市は、生活保護受給世帯の進学率は全世帯の進学率よりも低いこと、進学先に定時制を選択するケースが多いこと、高校に進学しても途中で退学する割合が多いことなどに着目し事業目的を次のとおりとした。

#### 〈事業目的(平成24年度—26年度)〉

「生活保護受給世帯の中学生に対して、学習支援を実施し、自ら考え・学ぶことの大切さを教え、学習習慣を身につけることにより基礎的な学力向上を図り、高校進学を促進することを目的とする。」

しかしながら、私たちは高校進学のための学習支援だけではなく、子どもの貧困の特徴を捉えた事業展開を加えることで、私たち活動協会がこの事業を受託する意味があるのではないかと考えた。

先にも述べたとおり、「子どもの貧困」は「貧困家庭に育つ子ども」を意味し、貧困な環境は、子どもたちから多くの機会を奪うことである。さまざまな機会(体験)を通して、子どもたちは学習だけではなく、コミュニケーションや社会性、積極性を学んでいくものである。そして何よりも他者から価値ある存在と認められ、尊重されることで自分を信頼できる大人になっていく。この事業を活動協会が受託する意味は、そうした貧困な環境により奪われたさまざまな機会(体験)を取り戻すことができるようなプログラム展開を提案することだと視点を定めた。単なる学習支援であれば、活動協会が担う必要はなく、もっと適切な団体があると思う。しかしながら、この事業を通して中学生期に身につけてほしい力は学力だけではなく、自分を認める力であり、相手を認める力である。そうして、自分への信頼を取り戻すことができれば、将来への希望、夢を描くことができ、学力向上は自然と後からついてくるものと考え。このような理念のもと、平成24年度より札幌市から受託を受け、活動協会スタイルの学習支援事業がスタートした。

#### (1)事業名

##### 札幌まなびのサポート事業 遊學舎(愛称)まなべえ

「学習支援事業」というと塾の補完的機能のみを想像されてしまうことや、中学生にとって敷居が高いイメージがあること、学習だけに特化した塾ではなく、もっと気軽に参加できるイメージがもてるよう、愛称「まなべえ」を全面にだして活動している。その狙いどおり、この愛称はすぐに定着した。

#### (2)実施会場数

平成24年度	西区	5会場
平成25年度	5区※ <sup>1</sup>	25会場 (各区5会場)
平成26年度	全区(10区)	30会場 (各区3会場)
平成27年度	全区(10区)	30会場※ <sup>2</sup> (区によって2～5会場)

※<sup>1</sup> 西区・中央区・白石区・豊平区・清田区

※<sup>2</sup> 中央区・清田区・厚別区・南区・手稲区＝2会場 / 白石区＝4会場 / 西区・豊平区＝3会場 / 北区・東区＝5会場

試行的に始まった平成24年度から、毎年事業が拡大している。開始から2年後には札幌市全域に会場が設置され、全区での実施となった。このことから、この事業が社会的に必要とされている機運の中にあるのだということがわかる。また、平成26年度は全区一律に3会場の設置だったが、地域により対象世帯数は大きく異なるため、平成27年度は、対象者の人数によって会場数を変更し、必要に応じた適正数となった。

### (3)実施概要

対象：生活保護受給世帯の中学生(1年生～3年生)

※平成27年度からは、就学援助利用世帯も対象となる。

回数：週1回

時間：平日 18:15—20:15(2時間)

土曜日 10:00—正午(2時間)

会場：主に児童会館

定員：各会場15名(中学1年生～3年生)

平成27年4月から施行された「生活困窮者自立支援法」に基づき、事業の対象者は、生活保護受給家庭のみから就学援助利用世帯へと拡大した。札幌市における対象者は、生活保護受給世帯の中学生約2,000人から就学援助利用世帯の中学生を含むと10,000人と大幅に対象者が増加。対象者の増加に伴い、申込者は定員を大幅に超え、参加を希望しても参加できず、キャンセル待ちの状態となっている。

私たち活動協会の強みは、札幌市内の児童会館全館を指定管理者として管理・運営しているところにある。札幌市は104館の児童会館があり、地域に開かれた活動を目指している。そういった環境であるため、市内30会場を確保することは、他の事業との兼ね合いで容易ではないものの、不可能ではない。児童会館の開設時間が18時まで(児童クラブの延長利用は有料で19時まで)であることから、まなべの開始時間は18時15分という設定で行っている。できるだけ、参加者のプライバシーを尊重するため、児童会館開設時間を避けての実施となる。そのため、1会場のみ土曜日の午前中を設定しているが、この会場は、児童会館ではない施設を利用している。

### (4)体制および役割

#### ①各会場2名のコーディネーター

主に児童会館・ミニ児童会館の職員が担当する。30会場を運営するためには、現在、150名以上の職員が携わっている。

コーディネーターは、会場の進行・調整役として配置。年間を通したプログラムの作成や中学生の面談、学習支援サポーターへの助言、ミーティングの調整などを行う。中学生同士や、中学生と学習支援サポーターをつなぎ、信頼関係を築くサポートをする。

#### ②中学生2名に対して1名の学習支援サポーター(平成27年度は中学生3名に対して1名の学習支援サポーター)

主に大学生のボランティア(有償)が担っている。中には、教員退職者などの社会人も登録している。中学生に学習を教えることだけではなく、ロールモデルとしての役割を担う。中学生にとって、少し年上のお兄さん、お姉さんの存在は、今後の目標や数年後の自分をイメージするための助けとなる。そのため、学習支援サポーターの存在は、この事業にとって重要である。

学習支援サポーターの確保には、大学の協力がなくてはならない。大学の授業時間等で先生からアナウンスしていただいたり担当者から話をさせていただいたり、授業として取り上げて

いただいたりしながら、その人数を確保している。平成27年度は、国の予算が削減されたことから、札幌市の事業費も削減となり、学習支援サポーターの配置数が削減となった。

#### (5)中学生の参加人数および学習支援サポーターの登録人数

	中学生の登録人数 (各会場定員15名)	学習支援サポーターの登録人数
平成24年度	41名	45名
平成25年度	181名	97名
平成26年度	215名	148名
平成27年度	468名	181名

※平成24年度～26年度は、いずれの人数も3月末時点での登録人数。

平成27年度については、10月末時点での登録人数。

※主な協力大学は、札幌市内、近郊の大学14校。

## 4. 具体的な取り組み

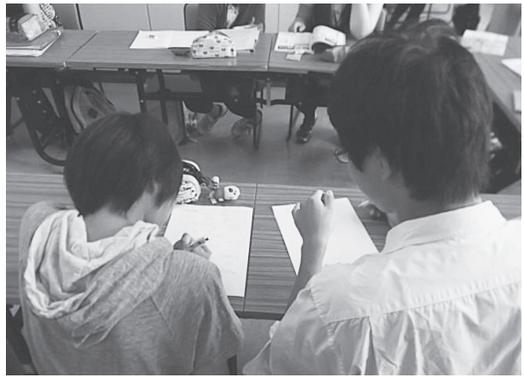
### (1)個別の学習支援について

まなべえとしての教材などはないため、中学生は自分の学習したい素材をもって来る。学校の教科書や問題集、宿題のプリントなどを持参し、基本的には自習のスタイルで行う。そこに、学習支援サポーターが声をかけ、わからない問題をサポートしていく。

初期の頃は、漢字の書き取りや英単語のスペルを書き写すだけの「作業」を黙々とこなす中学生も多い。このような「作業」は自分だけの世界で完結することができ、人と関わらなくても済む。そのようにガードしている中学生に対して、学習支援サポーターもなかなか近づけず、お互いに距離を置きながら探り合う時期がある。学習をとおしてだけではその距離を縮めることは難しい。一緒にゲームをしたりグループトーク、チーム作業などの時間を設定したりしながら、打ち解け、お互いに少しずつ自分を表現できるようになってくる。回数を重ねる中で中学生の「作業」が「学習」に変わり、中学生が徐々にわからないことを「わからない」と言えるようになってきた時に、関係性が築けてきたのだなと感じ

ることができる。

また、学習支援サポーターが、中学生のために問題を作ってあげている姿をよくみる。一人ひとりの理解度にあわせて問題を提供し、「できた」「わかった」を体験させていく。誰かが自分のために何かをしてくれるという経験は、中学生にとって「自分はそうしてもらえる価値のある存在なのだ」ということを実感する機会となる。そうやって、学習支援サポーターの思いが中学生に伝わっていくことで、中学生の表情に変化が生まれる。



### (2)体験学習・交流活動について

活動協会スタイルのひとつの特徴として、積極的に体験学習を取り入れていることがあげられる。各会場での「お楽しみ会」や会場の枠を超えて、複数の会場メンバーが合同で行う「野外活動」などで共同作業を取り入れる。共同作業をとおして、一人ひとりが役割をもって関わることの大切さを伝えている。

一緒に調理をして食べるという活動は初期の頃の仲間作りに最適である。調理はみんなで目指すゴールが明確であり、一人ひとりが役割を全うし、協力しないと完成しない。また、道具の貸し借りや野菜の切り方の相談など、声をかけ合わないと進まないため自然と交流が生まれる。人は、グループの中で役割を与えられ、その役割を果たそうと責任感を持つことで帰属感が生まれ、その場が大切な「居場所」となる。自分の責任で場を作っていくことを意識することで、お互いを思いやる気持ちが生まれる。



お好み焼きを作った際、マヨネーズを「貸して」「ありがとう」「使う？」などの会話が自然と生まれたり、残っている焼きそばを「食べる人いる？」など、全体に声をかけられる子がいたり、一人ひとりの優しさと仲間としてお互いに目を向けようと努力している姿を見ることができる。中学生は、そのような活動をとおして、大学生との距離も縮めながら自己解放のきっかけを掴んでいる。

また、調理の様子をみたり、一緒に食事をしながら会話をしたりすると、中学生の家庭での食事の様子などを聞き出しやすい。私たちスタッフは、少しずつ中学生たちの家庭環境なども聞き取りながら、一人ひとりの学習計画や支援のあり方について考えていく素材を拾い集めていく作業を行う。

## 5. 中学生たちから私たちが学ぶこと

ある中学生は、「めんどくさい」「たるい」「ねむい」「お腹すいた」ばかりを繰り返していた。しかし、どんなに天気が悪くても休むことなく1年間、ほぼ皆勤賞だった。また、ある中学生は、学習道具を持たずに手ぶらで来館することも多々あった。それでも、ふらりとやって来る。中学生がまなべえに期待していること、まなべえに来る目的はさまざまではあるが、この場が自分の「居場所」であると感じていることに間違いはないのだと思う。中学生の振り返りの言葉には、「成績が上がった」「勉強がわかるようになった」など学習面での良かった声もある一方で、「友達ができた」「人と話しをすることが前よりできる

ようになった」など、情緒面での良かった声も多数あった。中学生たちは、まなべえでの学習や体験活動をとおして、「学び直し」とともに「遊び直し」をしているように思う。「学校」という空間に居ても、その場が自分たちの居場所になっていないと、十分に活動に入り込むことが出来ないのである。中学生はまなべえの活動の中で始めての体験をたくさんしている。

また、まなべえで難しかったことももちろん多数ふりかえっていた。私は、それらの難しかったという彼らの声の裏には、「だけどがんばった自分を認めてほしい」という承認欲求を感じる。だからこそ、一人ひとりに「がんばったね」と声をかけてあげたい。

## 6. 中学生をとおして大学生が自分と向き合う

この事業の要ともなっている学習支援サポーターの役割に着目したい。先にも述べたように、学習を支援するボランティアに大学生を起用しているのは、中学生の良きロールモデルとなることを期待しているからである。大学生には、具体的な自分の経験や現在の自分の大学生生活、そして将来の夢などを積極的に語るようにお願いしている。中学生は、さまざまな経験や学びをしている大学生との関わりによって、視野が広がっていく。たとえば、ダンスを学びに外国に行きたいという夢がある中学生は、留学経験のある大学生から外国の学校生活のことを聞き、英語の勉強に興味を持ったり、高校での部活やアルバイトの話の聞いたりしながら受験する高校について考えたり、大学生との会話をとおして、中学生は今後の目的を明確にすることができる。

大学生は日常の中では、中学生との接点はあまりないため、この活動をとおして中学生がどのような環境で過ごしているのか、どんな思いを持っているのかに思いを馳せ、自分自身を振り返るという体験につながっている。ある大学生は人を相手にすることにマニュアルでは解決できない困難さと直面することがあり、試行錯

誤の連続であると、活動を振り返り語っている。また、大学生の気づきの中で印象的だったのは、「はじめは、中学生と仲良くなりたくてたくさん話しかけていたが、自分が話をするのではなく、中学生の話を聴くことが大切なのだと感じた」と振り返った言葉だ。まさに、「寄り添うこと」の意味を大学生自身が自分の体験から気づくことができたのだと思う。「助言よりも共感を重視した」などのコメントもあり、自分の経験から見つけた答えは、大学生にとって大きな成果となり、自分自身の行動の変化へとつなげることができる。カウンセリングなどの知識がなくても、常にどうしたらいいのか、何が間違っているのかなど、自問自答する姿勢が結果となって現れた。このように、大学生は中学生との関わりの中から、相手の立場に立って物事を考えたり、ペースを合わせたり、中学生の良き伴走者となる関わり方を身につけている。

人とかかわる仕事は、すぐに結果が見えないことで、自分の対応が正しいのかどうか不安になる。それは、大学生も私たちスタッフも同様である。中学生の反応に一喜一憂しながら、少しずつ前に進んでいく作業は、大学生にとって厳しい道りではある。しかし、中学生からの言葉や表情などから「ありがとう」のサインに気づき、それをしっかりと受け止めることができるようになると、より中学生とのかかわり方に変化が生まれる。与えるだけではなく、与えてもらうというギフトの交換である。大学の授業だけでは気づくことができないリアルな体験は大学生にとって、とてもよい刺激になっている。

こうして、1年間活動を続けた大学生は、自分自身の成長とともに、自分の将来についても考える機会となっている。「中学生のためと思ってはじめたボランティアだったが、結果的に自分自身の視野がひろがった」という大学生の振り返りが、その変化を表現している。

まなべえに学習支援サポーターとして登録する際、できるかぎり面談をしている。大学生を育てることもこの事業の一環と捉えていることもあり、面談で登録を断ることはほとんどない。

コミュニケーションが大丈夫だろうかと思うタイプの大学生も、いったん活動に参加し、実践の中で成長を促す。大学2年生だった女子学生は、活動を初めて3カ月後、自分にとってもこのまなべえの場が居場所だと言った。彼女は、表情が乏しく、なかなか自分から働きかけることが得意ではなかった。しかし、スタッフが中学生との橋渡しをしながら、コミュニケーションをとれるようにサポートした。毎週、定期的にかかわる人と空間があり、必要とされるかわりには、彼女にとっても自分の存在を認めてもらえる経験となったのだと思う。この経験が、大学生活や今後社会に出る際にも役立つことを期待したい。

## 7. 人材育成の視点からみた「まなべえ」

この事業がスタートした当初は「中学生の学習支援」ということに着目し、その学習を支える大学生の成長についてはあまり想定していなかった。しかしながら、大学生とともに活動を行いながら、大学生自身が自分たちの立場や自分たちの役割について真剣に向き合い、さまざまな工夫をすることで、大学生自身の変化が見られるようになった。大学生のそのような姿勢に私たち職員が刺激を受ける場面も多々あった。それらのことから、私たち職員は、中学生の支援だけではなく、大学生を育てるという役割もあるのだということに気がついた。この事業は、中学生の学習支援活動とおして、スタッフを含めこの活動にかかわるすべての立場の人が成長することができる双方向型の事業であるといえる。

先日、大学生に与える影響の大きさに理解を示し、多大なる協力をしてくださっていた大学の先生が急逝された。ともに協力大学の拡大や学生への周知・研修などを行い、多数の大学との連携の道筋を作ってくれた先生に感謝し、今後は先生の思いを引き継ぎ、ネットワークを発展させていかなくは、と身が引き締まる思いである。大学生を育てるということは、次の支援の担い手を育てることにつながる。現在、ま

なべえは4年目を迎え、学習支援サポーターとしてかかわっていた当時の大学生が、活動協会職員となり、現在まなべえのスタッフとして中学生・大学生の支援にあたっている循環が生まれはじめた。このような人材育成の循環の輪が広がり、思いを持った職員が事業に携わることで、より一層、有意義な事業展開ができるようになる。あと数年後には、まなべえで学んだ中学生が大学生となり、学習支援サポーターとして戻って来てくれることも期待したい。

## 8. おわりに

児童会館で学習支援を行う意味は、「貧困の連鎖を断ち切る」という福祉的な要素だけではなく、人材育成という面から見たときに、今まで児童会館職員として培ってきた人と人をつなぐスキル、無条件に肯定的に子どもたちを受け入れる姿勢などが生かされ、児童会館事業の本質がつまった事業展開ができることにあると思う。

札幌市の児童会館は、平成18年度より中・高校生の夜間事業をスタートさせた。通常の児童会館の利用時間は18時までだが、週に2回、中学生は19時まで、高校生は21時まで児童会館を利用することができる。その事業の中で、中学生・高校生と向き合い、その年代特有の課題や必要な支援について考えながら、中・高校生事業のあり方と向き合ってきた。その経験があったからこそ、平成24年度から生活困窮家庭の学習支援事業「まなべえ」にも着手することができている。そして、地域に開かれた児童会館事業を展開するため、多くのボランティアの受け入れも行ってきている。

現在の児童会館では、直接的な経済的支援や継続した食の提供はできないが、中学生本人の生き方に働きかける支援はできる。それは、学習支援事業だからといって、あらたまって支援の方法を探るのではなく、児童会館職員として、中学生という多感な時期の子どもたちを対象に、その子たちの育っている環境そのものを認め、受け入れながら、私たちにできる支援を考えるという、今まで実践してきたことの延長である

ということに、私は4年目にして気づかされた。

以前、韓国の児童館を視察させていただいた際、韓国の児童館の役割は、どの家庭も同じスタートラインに立てるように支援することが目的と言っており、札幌の児童会館よりも福祉的要素が強いことが印象的だった。そのため、韓国の児童館では学習支援や食の提供なども行われていた。その視察から5年ほど経った現在の日本の児童会館でも、もしかすると韓国のように福祉的要素をもっと盛り込んでいく時期にきているかもしれない。

「子どもの権利条約」では、すべての子どもたちに「生きる権利」「守られる権利」「育つ権利」「参加する権利」があると定義されている。生存=(イコール)生活ではない。生きるためにギリギリの生活ではなく、人は、社会参加ができてはじめて「生活している」と言えるのである。家族の力だけで子どもたちの権利を守ることができないのであれば、社会がその手助けをする必要がある。児童会館は、地域の子どもの権利を守る義務がある。

最後に、この事業の目的に立ち返りたい。平成24年度から26年度の事業目的は、前掲(3. 札幌市のとりくみ)したとおり、「基礎学力の向上を図り、高校進学を促進すること」だったが、平成27年度の事業目的には、「自尊心や自己肯定感を持てるような居場所を提供する」と加えられた。私たちが取り組んできた思いと成果が札幌市に認められた結果だと感謝している。この事業は中学生を対象にしているが、まなべえを卒業しても児童会館は18歳まで利用できる施設であること、その利点を生かして、まなべえ卒業後も継続した支援ができるようにその道を確立したい。そうすることで、児童会館がこの事業を受託する意味がより深くなる。児童会館がすべての子どもたちの「居場所」であるよう、これからも務めていきたい。